



印 旛



令和7(2025)年6月

ふるさとのいまを知る
いまを知るといことは、
昔を知ることでもあります。
いんば地域の人は、どうやって生きて来たのだろうか。
大切に保存されていた写真からふりかえってみます。

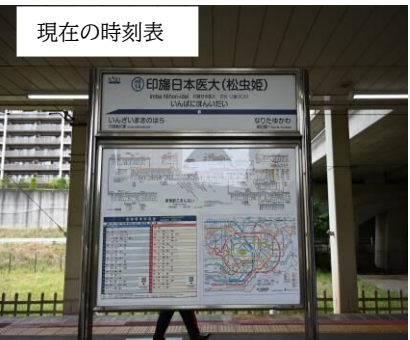


昭和 61(1986)年開館時



駅開業セレモニー

昭和100年 昔を学び、未来へ



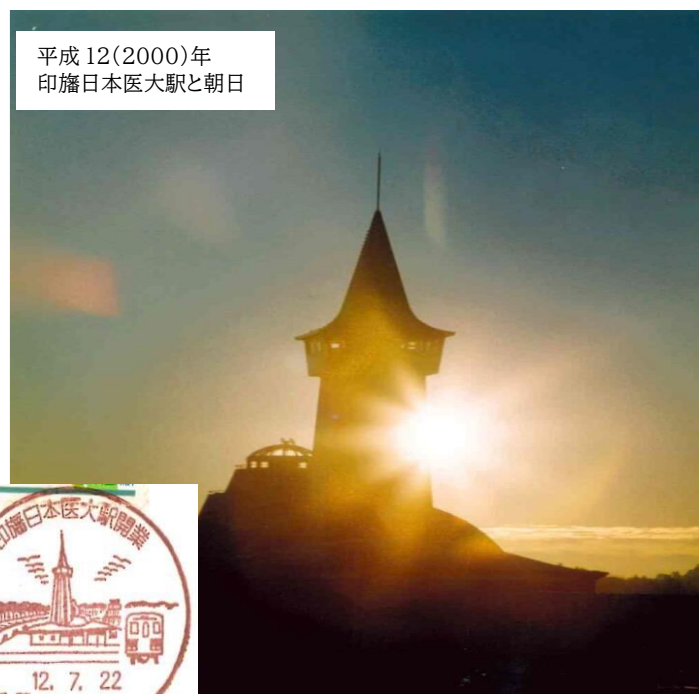
現在の時刻表



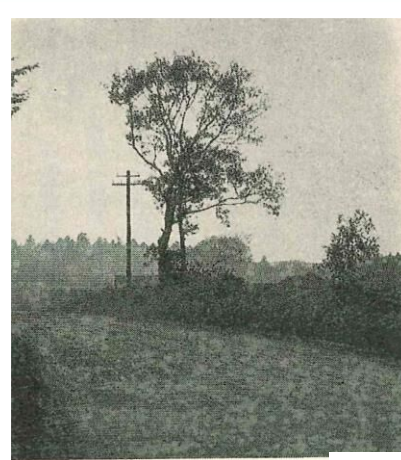
令和7(2025)年 印旛日本医大駅展望台から



平成12(2000)年
印旛日本医大駅と朝日



青年団の会報
昭和40.41
(1965.1966)年頃



山田一平賀のミチ

印旛村史通史Ⅱより



旧印旛村役場(昭和30年代)



東京行商(師戸)
千葉県立中央博物館所蔵・撮影林辰雄氏



令和7(2025)年



平成12(2000)年



紺の着物の仕事着
印旛村史通史Ⅱより



舟戸大橋完成
昭和38(1963)年3月23日
竣工式 佐倉市所蔵



稲刈り鎌 資料館所蔵



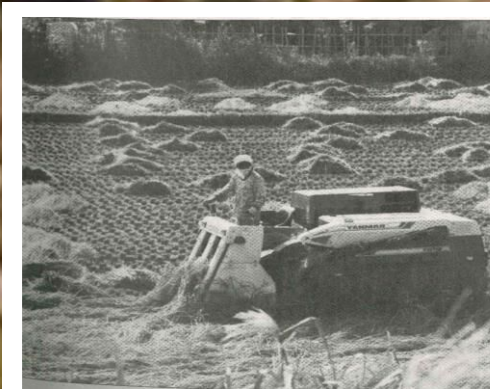
稲刈機 資料館所蔵



田げた 資料館所蔵



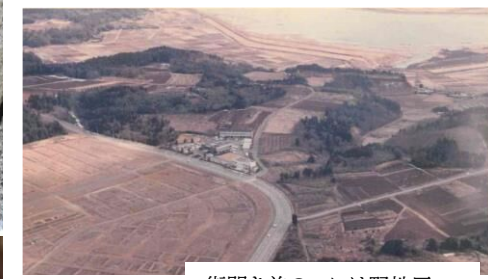
田植え



昭和57(1982)年 コンバインで収穫



稲刈り



街開き前のいには野地区
真ん中が現在の印旛支所



平成6(1994)年 日本医科大学千葉北総病院開院



平成6(1994)年 コスモス畑



昭和63(1988)年 順天堂大学開校

満開の 吉高の大桜

〔屋外展示〕
このみやきんじょう
二宮金次郎像
二宮金次郎(尊徳)は江戸時代後期の人で、財政や農村の再建に尽力した人です。勤勉な模範として象徴される人物です。全国各地の主に小学校などに金次郎像が建てられ、薪を背負って歩きながら読書をしている像が多くみられます。
(寄贈 印旛村文化財保存会 平成八年十月十日)

■展示資料紹介 提灯網 ちようちんあみ

印旛沼での漁の一つに「提灯網」と呼ばれる漁がありました。提灯網は細い竹で円錐状の枠を作り、同じく円錐状の網を取り付け、先に紐をつけて上げ下げができるようにし、「サスリ」と呼ぶ細い竹の棒の先に竹の環をつけた棒を用意します。冬季の魚は沼底の泥の中に隠れており、その場所はほかの場所と泥土の色が違っていため、舟からこの場所を見つけ、網を上からまっすぐに下ろしてかぶせ、サスリでつくと飛び出して逃げようとして網にぶつかったところを網の紐をゆるめ、網をたるませ、魚を引きあげます。水が濁ってはいは捕ることができません。沼の水深が深くなつてからやらなくなった漁法です。「提灯網」の名前の由来は提灯のような形状からでしょうか。



■資料館講座(資料館学習室)

○印旛沼の成り立ち

講師 日浦博昭氏

(公益財団法人 印旛沼環境基金)

日時 七月二十七日(日)

午後一時半から午後三時半

○埴輪(はにわ)を作ろう

日時 八月二十四日(日)午前中

対象 小学生以上

※詳しい募集については、広報、市ホームページでお知らせします。

■映像記録を放映中

○印西市無形民俗文化財

浦部の神楽、鳥見神社の神楽。鳥見神社の獅子舞、八幡神社の獅子舞、別所の獅子舞、いなぎ獅子舞。武西の六座念仏の称念仏踊り。印西伝統芸能フェスティバル。

○すばなし(ききのは会)

印旛沼の竜、松虫姫、お鶴と狍犬、そうふけつぱらのきつね、頼政塚とじごくそば、なまやけのやへい。

■有償頒布

○資料館刊行物

研究紀要 創刊号〜7号

■利用案内

開館時間 午前九時から午後五時

休館日 月曜日(この日が祝日に当たるときはその後

の日で最も近い休日でない日)・

祝日・年末・年始(十二月二十八日〜一月

四日)・特別の事情により教育委員会が認

めた日

入館料 無料

交通案内 北総鉄道「印旛日本医大駅」より

宗像路線バス(大成交通)「岩戸」下車徒歩五分

■案内図



■編集後記

館報第十四号をお届けします。

平成十二(二〇〇〇)年三月の第十三号を最後に休刊しておりましたが、二十五年後の昭和百年にあたる今年、令和七年に復刊することになりました。この間、印西市・印旛村・本埜村の合併、東日本大震災、平成から令和へ元号が変わり、コロナ禍などさまざまな出来事がありました。

資料館設置が決まった昭和五十年代は農具などいわゆる古い道具を収集し、保存することに重きを置いていましたが、昭和百年を迎え、収集すべき資料も変化しています。「先人の知恵」を後世に伝える役割を忘れないようにしたいと思います。(N)

昭和六十一(一九八六)年に印旛歴史民俗資料館は、当時の印旛村の総力を挙げて建設されたそうです。高度成長時代の波にのまれ、昔のものがなくなってしまう前にみんなで持ち寄って当時の暮らしを忘れないようにということでした。そんな資料館も来年で四十周年を迎えます。そろそろ次に進む時がきているのではないのでしょうか。(み)

